

## 文学に現われた北海道の火山

— 駒ヶ岳と羊蹄山 —

題を与えられて困惑した。たしかに「火山」の名称は知っているが、さて、火山以外の山は何というのだろうか、と思つたものだ。恥かしい話である。大百科事典を引いてみると、なんのことはない、「山は大別して火山と火山以外の山にわかれる」とある。

しからば、どれが前者で、どれが後者なのか。その事典に出ている「日本のおもな山」の一覧表を見て、斜里岳が火山で、天塩岳がそれ以外の山だと知つても、区別がつかないから、ハイそうですかとしかいいようがない。もう一つ、火山は火山でも、聞きかじつていた活火山と休火山と死火山の違いはどこにあるのだろうかという気になり出した。やはりその事典によると、数万〜数十万年におよぶ火山の寿命からみて、過去十数世紀間の歴史時代などは一瞬にすぎず、この三分類は不合理で弊害を伴う、という。だから、最近では活火山の呼称は広義に使われている由で、これなら素人にも理解がゆく。

火山が文学に現われる例は多い。そのうちのいくつかの作品の描写を紹介してみよう。

まず、北海道の玄関口・函館を過ぎると駒ヶ岳が大沼との対照の妙を

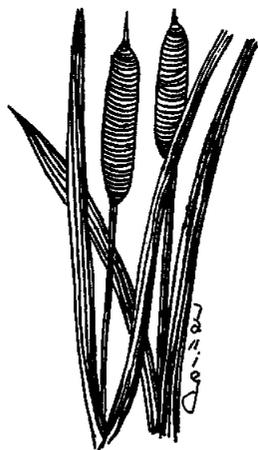
なして眺められる。さすがに、文人墨客による車窓からの印象が目につく。

徳富蘆花に自伝小説「富士」があり、その第三巻（福永書店、昭2・1）につぎの描写がある。

〔函館に〕上陸した熊次は直ぐ大沼を志した。其処まで今汽車が通ふ。函館から上ること一時間にして、大沼に來た。山の上の思ったより大きな沼が大小二つもある。当面に駒が岳の尖った頭が見下ろして居る。白樺の生えた大小の嶋々が浮いて居る。

蘆花のその旅は、明治三十六年の八月である。小説「寄生木」（警醒社、明42・12）を産む旅であったが、その作品を完成して、主人公のモデルを旭川師団に偲び、十勝の陸別に関寛翁を訪ねるべく、明治四十三年九月に蘆花は再び来道した。「みみずのたほこと」（警醒社、大2・3）のなかの「大沼」にこうみえる。

「黄金色に藻の花の咲く入江に出ると、広々とした沼の面、絶えて久しい赤禿の駒が岳が忽眼前に躍り出た。東の肩からあるか無いかの煙が立上つて居る。余が明治三十六年の夏來た頃は、汽車はまだ森までしかかゝって居なかつた。大沼公園にも粗末な料理屋が二三軒水際に立って居



た。駒が岳の噴火も其後の事である。然し汽車は釧路まで通うても、駒が岳は噴火しても、大沼其ものは旧に仍つて晴々した而して寂かな眺である」。

函館本線が開通したあとの明治四十一年に佐藤春夫が車窓から駒ヶ岳に接している。「わが北海道」(北海タイムス、昭39、1~3)の第一意、駒ヶ岳・大沼によると、「狩勝の雄大な風景と駒ヶ岳の山容と大沼の野趣とがわたくしの最初の渡道以来、最もわたしの気に入った風景」であった。「本来火山地帯の風景美が北海道の特色であつてみれば、それを北海道の玄関口で駒ヶ岳とその山麓の湖沼とで代表的に捉へ得たのは決してまちがひではない」とも書いており、さらに一節を引くと、「その山裾をめぐる車窓に、刻々移り変つて行く山容をよるこび眺めながら山が野の林のかけになつて、山麓をほとんど一周し終つたかと思つたのに、またひよくりと姿を現はしてからは、ふり返つて見ると行けども行けども、いつまでも奔馬のやうに車窓を追うて姿の消えないこの山をいかに不思議なものやうに秋雄(末弟)は言つたものであつた」。

車窓からの駒ヶ岳をよく捉えている一文だ。

本道での放浪体験を素材にした「旅役者」もので文壇に登場した長田幹彦に、人妻と純情青年との恋愛を描いた長篇「霧」(朝日新聞、大2・11)がある。後半の舞台を北海道に移し、駒ヶ岳山麓の雪の平原で情死する場面で結ぶ。

「馬場が進むに従つて、荒寥とした駒ヶ嶽嶽野の大傾斜が漸次と眼の前に開けて来た。見る限り唯茫漠とした一望の雪原で、葉の落ち尽した刺々しい針葉樹の群れと、火山力の余勢を示す断層の起伏とが僅かに雪の面に創痕のやうな黒ずんだ影を描いてゐる」。

宮沢賢治に「弱々しく白いそらにのびあがり」にはじまる「駒ヶ岳」という短い詩がある。名詩集「春と修羅」第一集(私家版、大13・4)に収められているが、大正十二年二十七歳のおり、二度目の来道作品だ。

駒ヶ岳そびやく肩の紫に水の面匂ひて夜現けぬるかな

佐々木信綱(昭2)

海門を越えて来たはたと面向ふ蝦夷駒ヶ岳火を噴きており

四賀 光子(昭7)

丹羽文雄が北海道に素材を求めて来道したのは、太平洋戦争開戦前夜の昭和十六年春であつた。取材作「暁闇」(中央公論「昭16・8」)の主人公である風俗作家梶は、*「暗い谷間」*にあつて執筆がおもりにまかせず、そんなとき北海道の友人のすすめもあつて慶応四年に起きた穂足内(小樽)騒動に興味を抱き、やつてくる。函館から札幌へ。

「右手の窓に駒ヶ岳が迫つたりはなれたりして、汽車と共にどこまでも走つていた。噴火のとき頭が半分とんだのであろう、駒ヶ岳は、のびのびと空間を占めていて、印象的であつた。あたりに競う山がなく、それだけがなだらな裾を十分につけて拡がっていた。頂上に近付いて漸く峻しくなつてゐるが、女性的な線の中に犯すことの出来ない山の厳しさをたたえていた。伊吹山より数等みごとだと梶は眺めやつた」。

戦後の小説を一つだけあげてみよう。

三島由紀夫の「死の島」(改造「昭26・4」)である。新進作家としての地位を確立していた二十五歳の由紀夫が「夏子の冒険」を書くために来道したのは二十五年だが、「死の島」もその旅の所産で、作者の分身である菊田次郎のもの一つであり、旅に出て己れ自身の生の回復をはかる佳篇だ。

「菊田次郎の乗つた函館発網走行の閑散な汽車が、林檎畑やポプラの景観をくりひろげる渡島大野をすぎ、大沼駅に到着したのは午すぎであつた」で開幕するが、駒ヶ岳はこんなふう描かれている。

「大沼は函館市からそう遠くない。函館山頂に立つて眺めると、横津岳連峰の西端に駒ヶ岳の噴煙が日に当って白く光つて見える。突兀たるその山頂が角のように地平を抜んで出ている。むかし駒ヶ岳噴火のために川水が堰き止められてきた大沼は、その山裾にあるのである」。

同じ駒ヶ岳の白い噴煙は、宿の午飯をすませた次郎が、大沼公園の一端の月見橋畔に立ったときに、丁度望遠鏡の焦点をうまく合わせたように、きのう函館山頂で見た火口の数倍の大きさと鮮明度とを以て望まれた。稀に噴煙は火口の上にゆるやかに環をえがいていた。代赭いろの火口の内壁にたゆたいながら、立去りがてにしている煙のさまは、次郎の目に親近感を与えたのである。用もないのに放課後の学校からなかなか帰ろうとしない小学生のようだと次郎は思った。

なかなか味のある比喩である。

函館本線に沿っての代表的な火山は、なんといっても羊蹄山である。日本書紀に後方羊蹄山と記載されており、蝦夷富士ともマツカリヌブリとも呼ばれているが、ここを舞台にした文学作品で知名度が高いのは有島武郎の名作「カインの末裔」(『新小説』天6・7)である。よく冒頭の部分が引かれる。

「北海道の冬は空まで逼ってゐた。蝦夷富士と云はれるマツカリヌブリの麓に続く胆振の大草原を、日本海から内浦湾に吹きぬける西風が、打寄せる紺濤のやうに跡から跡から吹き払って行った。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になったマツカリヌブリは少し頭を前にこぎめて風に刃向ひながら黙ったまゝ突立って居た。昆布嶽の斜面に小さく集まった雲の塊を眼がけて日は沈みかゝってゐた。草原の上には一本の樹木も生えてゐなかつた。心細い程真直な一筋道を、彼と彼の妻だけが、よろ／＼と歩く二本の立木のやうに動いて行った」。

このすぐれた自然描写のなかに開拓農民である主人公たちの運命が暗示されているが、羊蹄山を描いて「カインの末裔」と双壁をなすのが小林多喜二の「東俱知安行」(『改造』昭5・12)である。

「汽車から下りると、すぐ眼の前にぶつかるようにマツカリヌブリが晴れた冬空に浮かんでいるのが見えた。そのだゞ広い裾野にある俱知安の町並は、雪の中から屋根だけを出してうずまっていた」。

拓銀小樽支店に勤めていた多喜二が、昭和三年に第一回普通選挙の応援のため俱知安駅に降り立った折の印象である。やがて馬繰で東俱知安(現・京極)へ。

「街外れ近くになると、道はそのまゝ雪の広い野に出ていた。汚れた、でこぼこの路が、ギラギラ光っている雪の原を、二、三本しか線の架つてない電柱に沿って、ずウト、マツカリヌブリの裾に続いていた。電柱は遠くでマツチの樺を間隔をちぎめて並べたように見えている」。

「馬繰はすぐ町の外へ出てしまった。右手は広漠とした裾野で、マツカリヌブリがペンキ絵の富士山のように聳えている。左手には茅ぶきの百姓家が所々にあるだけで、一面の雪の平原が大海原のように、ゆるくうねって広がっていた。私達はマツカリヌブリの裾を一直線に奥に入って行った。だん／＼雪の量が多くなってきた。両側が積み重ねた雪で高くなり、塹壕の底を走っているような感じだった」。

羊蹄山を背景に、鮮烈な冬の描写がつづく。

羊蹄山を目の前にして育った作家に畔柳二美がおおり、「私のまち!!・狩太」(北海道新聞、昭38・1・23)にこう書かれている。

「父が、王子製紙の発電所に勤務していた関係で、生まれは千歳の山奥。八歳から二十歳まで、途中、女学校の寄宿舎時代を除いて狩太町にある王子第一発電所の社宅で暮らしました。// 狩太」ということばで、常に頭に浮かぶのは、羊蹄、尻別川、雪、有島農場、温泉……。

羊蹄——この山は狩太からのながめがもつとも美しく、したがって狩太は北海道一景色のいいところ——私は今でもそう信じています」。

彼女の出世作であり代表作である「姉妹」(講談社、昭29・11)は毎日出版文化賞受賞作でもあるが、自伝的小説で、狩太(現・ニセコ)の四季がふんだんに描かれている。羊蹄山が現われる箇所を一、二引くと、

「三日前から、圭子も、俊子も冬休みだ。発電所は、どこを見渡しても銀世界。北海道でも雪が多いので有名なこの辺りは、羊蹄山もそのまわりの山々も真っ白になっている。それに、今日は朝から吹雪になって、

粉雪が縦横に乱れ走り、どこに空があるのやら、家があるのやら、さっぱりわからない。

「赤煉瓦の発電所も、三本の鉄管も、段々にならぶ住宅の屋根も、こんもり雪をいただいて銀色に、キラキラ、キラキラ。東方には、富士山そっくりの羊蹄山が白くそびえ、北方の、先とがりの硫黄山は、大小さまさまの連山を従えここをとりまく。山裾の雪間を縫って流れる川は、しじゅう、おやすみなく、ごうごう、ごうごう。」

ほかに羊蹄山を描いた小説に木村不二男「有鳥供養」(新潮昭16・12)、沢野久雄「松前富士」(文学界昭32・4)などがあり、藤森成吉の「狩太の農場―北海道紀行の一節―」(大11)や伊藤信吉の「マッカリヌプリの麓で」(旅人昭40・7)などの紀行もあけなくてはならないが、ここではもう一つ、林芙美子の小説をみておきたい。

「放浪記」で一躍女流作家にのしあがった彼女が北海道・樺太に旅したのは、昭和八年のことである。このとき立ち寄った倶知安がひどく気に入ったとみえて、「七つの燈」(むらさき出版部、昭16・1)と「田園日記」(新潮社、昭17・12)の舞台になっている。

あとの小説から引くと、息子づれの未亡人京子が、亡き夫の実家である倶知安に着いたのはその日の夕方であった。「東風が吹いてゐて、小さい町全体がごうごうと鳴ってゐる感じだった。」「小じんまりとした郵便局や、医院や、古風な馬車屋なんかの並んでゐる軒の低い広い通りを」歩き、「トタンで張った如何にも新開地らしい寺の横を曲って、えぞ富士の見える広い畑地の向うに、青いペンキ塗りの工場のやうな延岡の家が見えた。」

翌日は晴れの日で「えぞ富士の頂の白い雲が浮いて気持のいゝ風がそよそよと吹いてゐた」というあんばいになるが、この作品にも「七つの燈」にも半月湖が現われる。芙美子は、倶知安の南部で羊蹄山の北西山麓にあるこの火口湖がお気に入りであったようだ。

「湖は案外小さかったけれども、気味の悪いほど静かで清浄な水面で

あった。時々湖の魚が水面へ波紋を描いてゐる。湖の周囲は、おそひかかるかのような新緑の波であった(「七つの燈」)。

若き日の伊藤整が半月湖を経て羊蹄山を征服したのは小樽中学四年生のときの大正九年夏のこと、同行者の北見恂吉は「少年譜」のなかにこう描いている。

「倶知安陸道を抜けると、眼の前に羊蹄山が雄大な姿を現わした。その裾をめぐって盆地が拓け、倶知安の町は「かたまりにあった」。一行三人は比羅夫駅で降り、東へ進む村道を歩いていった。開拓地が過ぎ、「羊蹄山はもう頂きは見えず、鼻先にその巨大な山膚を「一気に圧して迫っていた。振り返るとニセコ連峰のやさしい曲線がつづいていた。やがて伊藤整が「ほらあそこに半月湖が見えるよ」と指さした下に、文字通り半月の形をした湖が小さく碧く澄んでいた。

そこから山小屋のある八合目へ。「眼下に小さく見える半月湖が、急に暗く踏ると見る間に、針葉樹林が遠くゴ―と鳴り騒ぎ、それが津波の押しよせる様に近づいて我々の休んでいる周囲が薄暗くなった。風の咲きつける霧は刺す様に頬に痛かった。一行は相談のすえ悪天候のなか登山を続行し、ようやく山小屋にたどり着くことができた。

翌日、頂上をめざす。「累々とした大小の塔岩の間を縫いながら登った。終り頃は急斜面を這い上がった。いただきに辿りついて恐々と噴火口をのぞいた。摺鉢の底は存外浅くて、小さな水溜りがいくつも見え急な斜面には露出した巨岩が処々に出ていた。」

「昨夜苦しみ這い廻ったあたりを目でさがしながら、危なく助かった生命を、擦々と輝く太陽の光の下に深く感謝する気持になっていった。雲の海が少しづつ動いて、切れ間に下界が時々々ぞかれる様になった。山々の頂が島の様に平らな雲の海の上に浮び、又時々太陽の光を浴びた緑の盆地があたたかげに見えた。それは本当になつかしいものであった。急に私の胸に人間の住む世界のなつかしさが蘇って来た。」

少年の日の清新な息づかいが伝わってくる。(北海道文学館事務局)